

JR西日本財団 NEWS

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団

〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号 TEL: 06-6375-3202 FAX: 06-6375-3229

E-mail: jrwestaidan@westjr-anshin-f.jp http://www.westjr-anshin-f.jp/

2011.6 発行 Vol.4

CONTENTS

- 1 ▶ 東日本大震災に関する活動助成緊急募集
- 2 ● 寄稿「みんなが当事者：超巨大災害における被災地支援」
- 3 ▶ 主催事業紹介
 - 「鉄道安全セミナー」の開催
- 6 ● 「救急フェア」の開催
- 7 ▶ 助成事業紹介
 - 各公募助成先(2団体)
- 8 ▶ TOPICS
 - 今後の予定

東日本大震災に関する活動助成緊急募集

当財団では、このかつてない規模での被災者支援が強く要請されている東日本大震災の被害状況に接し、民間における公益活動の担い手の一員として、被災者の方々への支援・救済活動や心のケア等の活動に対し、少しでもお役に立ちたい一心から緊急に活動助成を実施しました。



岩手県野田村。津波被害の惨状。水飲み場は野田村保育所のもの。先生方の機転と努力で子どもたちは全員避難できた。

4月18日(月)～5月2日(月)のわずか2週間という短期間での募集にもかかわらず、NPO法人やボランティア団体をはじめ、この震災により結成された民間団体などから大変多くのご応募いただきました。どの応募内容も被災地や被災者の方々の現状を受け止め、自分たちができることを探し、精一杯取り組んでいこうという思いが伝わってくる活動ばかりでした。

今回の助成により、被災地や被災者の方々のお役に立つことができると切に願っています。今回ご応募いただいた団体の方をはじめ、日本全国に広がる力強い支援の輪、善意の輪を思えば、必ずやこの未曾



岩手県田老町。堤防の海側から陸側を見る。陸側(内側)も大きな被害を受けていることがわかる。有の事態を乗り越えることができるものと思っています。(写真提供：当財団事業審査評価委員会委員 矢守克也氏)

応募数	助成決定	助成金額
57件	10件	495万円

活動テーマ / 団体名	主な活動予定地	主な活動内容
岩手県宮古市におけるこころのケア支援活動 大阪医科大学神経精神医学教室同門会	岩手県 宮古市	病院機能の維持及び被災した医療者へのこころのケア等
東日本大震災仮設住宅生活支援ボランティア「おおぞら会」 特定非営利活動法人おおぞら	岩手県 宮古市	子育て支援や健康相談など被災者の方への支援活動等
西宮市における県外避難への支援プロジェクト 関西学院大学災害復興制度研究所	兵庫県 西宮市	被災者を対象とした交流会や児童への学習支援等
関西学院大学・今こそ Mastery for Service を!今こそ学生主体による“ご恩返し” 震災被災地支援バスを!プロジェクト (KGU ご恩返しバスプロジェクト) 関西学院ヒューマンサービスセンター	宮城県 石巻市	家屋内外の清掃や汚泥・瓦礫の撤去等
ひょうご生活応援プロジェクト 特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター	岩手県 遠野市	被災地へのボランティア派遣や仮居住地域への移送等
おもちゃの広場キャラバン隊 特定非営利活動法人湖西生涯学習まちづくり研究会どろんこ	宮城県 南三陸町、名取町、塩竈市、仙台市	手作りおもちゃを持参しての仮設住宅訪問等
東日本大震災被災地支援チーム「SAVE IWATE」×「東日本大震災応援ひょうごNPOネットワーク」 岩手県北中部キャンプ村開設プロジェクト 特定非営利活動法人シーズ加古川	岩手県 宮古市	ボランティアの受け入れ体制や宿泊拠点の整備等
被災外国人のための多言語情報提供及び電話相談 特定非営利活動法人多文化共生マネージャー全国協議会	滋賀県 大津市	5言語による電話相談及びその運営ノウハウの提供等
歓迎ピクニック、月一みちのく・だんわ室、なんでも相談会、その他 東日本大震災被災者さんへの「暮らしサポート隊」	兵庫県 全域	心と身体のケアのための定期的な集いやイベント等
東北・太平洋沖地震 第4次・第5次 救援活動 Union International Association for Volunteer (通称: ユー・アイ・アソシエーション)	岩手県 久慈市、 宮城県 気仙沼市、 茨城県 高萩市 他	がれき撤去などの復旧活動等

みんなが当事者：超巨大災害における被災地支援

JR西日本あんしん社会財団 事業審査評価委員会委員

矢守 克也 (やもり かつや)

京都大学防災研究所巨大災害研究センター長・京都大学大学院情報学研究所教授。主な専門領域は社会心理学、防災人間科学。『防災・減災の人間科学』『増補版〈生活防災〉のすすめ:東日本大震災と日本社会』等防災に関する著書多数。NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク理事、NPO法人大規模災害対策研究機構理事等を兼務。今回の東日本大震災にあたっていち早く現地入りし、被災地支援を行う。財団の東日本大震災に関する活動助成において主査として審査を行う。



2011年3月11日、非常に強い地震が東日本を中心に日本を襲い、特に東北地方の太平洋沿岸には、想像を絶する規模をもった大津波が押し寄せた。地震の揺れと大津波は多くの人命と財産を奪い、さらに、福島第1原子力発電所を危機的な状況に陥れた。この東日本大震災の直接、間接の影響は、この文章を執筆している時点(2011年5月末)でも現在進行形で継続しているし、今後相当期間にわたって続くであろう。

東日本大震災は、言うまでもなく、超巨大災害である。すなわち、本震災では、被災地の面的広がりが南北500キロメートルにも及ぶ。かつ、原発事故の影響もあって、そもそも広い被災地からさらに広域に被災者が避難することを余儀なくされている点で、超広域災害である。そして、本震災は、その影響が非常に長期に及ぶと予想される点で、超長期災害でもある。

超巨大災害は、国家的危機、緊急異常事態、未曾有の国難といったフレーズで形容されるように、一見すると、日常生活や暮らしとは隔絶された事象のように思われる。しかし、そうではない。むしろ、逆である。超広域とは、国全体ということであり、超長期とは、日常(ふだん)だということに気づく必要がある。すなわち、超巨大災害に対する支援や備えについて考えることは、見方を変えれば、ふだんの国づくりや社会のありよう、そして日常生活について考えることに他ならない。超巨大災害(超広域災害、超長期災害)では、「みんなが当事者」なのである。

逆に言えば、日常(あたりまえ)の中の、そのまとも日常的な(あたりまえな)部分で何が保証されていたかに気づくのは、きわめて非日常的なことが起こったとき(だけ)なことである。このことは、たとえば、直接的な被災地から地理的には遠く離れた西日本でも、いまだに大型の乾電池を入手しにくいこと、あるいは、この夏の節電について多くの取り組みが展開され始めていることなどを考えてみれば、よくわかるだろう。



青森県八戸市。
大型船舶が打ち上げられている

さて、「みんなが当事者」の原則は、もちろん、被災者や被災地に対する支援活動にもあてはまる。東日本大震災では、被災地の広大さに起因するアクセスの困難や原発事故の影響もあって、少なくとも公式の統計値(各地の社会福祉協議会が把握したボランティア数など)を見る限り、民間のボランティアによる支援活動が、「ボランティア元年」と称された阪神・淡路大震災(1995年)の時よりも低調だと見ることもできる。

しかし逆に、被災地の空間スケールが非常に広域にわたるといふ課題、あるいは、被災地の地域性が非常に多様である(たとえば、都市部もあれば海岸沿いの小集落もある、ベッドタウンもあれば漁村もあるなど)という課題を逆手にとった、新しいタイプの、そして今後が期待される意義深い支援活動も多く見られる。つまり、東日本大震災が、超巨大災害(超広域災害・超長期災害)であることを踏まえ、かつ、そこから要請される「みんなが当事者」の確立を展望した新しいタイプのボランティア活動も芽生えている。



岩手県野田村。瓦礫撤去のお手伝いをするボランティア
(日本災害救援ボランティアネットワークの活動)

いくつか例を挙げておこう。たとえば、新潟県は、福島県内からの避難者をもっとも多く受け入れた都道府県である(4月末時点で、合計約34,000人中、約7,800人)。県内の市町村では、自治体によって違いはあるものの、多くのボランティアが受け入れ先の集合住宅等で支援活動にあたっている。たとえば、筆者が籍を置く「日本災害救援ボランティア・ネットワーク(NVNAD)」(阪神・淡路大震災を機に設立)は、小千谷市や刈羽村で、当地の行政職員やボランティアの方々とともに、福島県からの避難者の支援のお手伝いをしている。当地のボランティアの多くは、中越地震(2004年)や中越沖地震(2007年)を経験している。つまり、東日本大震災の



岩手県田老町。
万里の長城とも称された、この津波防潮堤を津波は乗り越えていった。堤防の上にアルバムなどが見える。

被災者を支援しているのは元被災者たちであり、その方々をさらに阪神・淡路大震災の経験者がバックアップしているという構図である。NVNADが「被災地つながり」あるいは「被災地間リレー」と呼ぶ、こうした地域間連携は、民間団体だけではなく、民間企業間でも行政(自治体)間でも教育機関(学校)間でも進んでいる。超広域災害の被災地支援にとって、今後、不可欠なフレームワークとなろう。

もう一つ別の事例を挙げておこう。それは、「自分も何かしたいけれど、遠い被災地まで出かけることはできない…」という思いにこたえる試みである。社会貢献学会が主導する「あなたの思い出まわり隊」は、津波等で水や泥をかぶった写真(アルバム)などを無料で復元をするボランティア活動である。被災地で収集した写真等をいったん被災地外(遠隔地)に送ることで、遠隔地の多くのボランティアが、写真の洗浄、デジタル化、印刷などの作業に従事することを可能にしている。実際、被災地を訪れると、そこそこに、瓦礫から取り上げられたアルバムや写真を見ることができ、それらを何とか復元しようと格闘しているボランティアの姿があった。こうした活動も、超広域災害ならではの支援活動として注目される。

当財団でも、東日本大震災の被災地へ向けた支援活動をサポートすべく「緊急活動助成」を実施した。西日本は、阪神・淡路大震災はじめ、芸予地震、鳥取県西部地震など、近年多くの災害に見舞われてきた。その分、産官学民間問わず、防災・減災、そして、災害からの復旧・復興に関する経験やノウハウの持ち合わせが豊富である。すでに多くの団体・個人が被災地で活動し、またそうした活動を西日本からバックアップしている人たちがいる。今回の「緊急活動助成」は、こうした活動を後押しし、「みんなが当事者」の機運をさらに盛り上げる一助になるものと確信している。



平成23年3月10日（木）、尼崎市内で、市民生活を支える公共交通機関である鉄道を素材に、「安全」について考えていただける機会として「鉄道安全セミナー」を開催し、一般市民の方々や行政、公共交通事業者の方々など、約760名のご参加をいただきました。



芳賀 繁 (はが しげる) さん

立教大学現代心理学部教授。1953年生まれ。京都大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了。日本国鉄労働科学研究所、(財)鉄道総合技術研究所で鉄道の安全に関わる心理学、人間工学の研究に携わり、2006年から現職。専門は、産業心理学、人間工学。消費者庁「事故調査機関の在り方に関する検討会」委員、国交省運輸審議会安全確保部会専門委員、JR西日本安全諮問委員会委員、日本航空安全アドバイザーグループメンバーなどを務める。著書に「失敗のメカニズム—忘れ物から巨大事故まで—」「絵でみる失敗のしくみ」など多数。

失敗の心理学 ～ うっかりミスとメカニズムと対策 ～

うっかりミスの発生メカニズムについて

ちょっとした言い間違い、勘違いや聞き違いで、たくさんの事故が起きていますが、どのようにしてミスが起きるのかについて、少し心理学のお話をします。

失敗には3種類あります。まず、1つ目のミステイク、すなわち、錯覚・勘違い、聞き違い、見間違いはどのようにして起きるのかというと、人間は、認知するとき、自分の持っている鋳型を頭の中から取り出して、それに合わせて一番似ているものを「そうだ」と認識するわけですが、その照合のときにいろいろな現象が起きます。それから、あまり詳しく見たり聞いたりしないで、コストをかけずに判断する傾向があり、慣れた仕事をしているときとか日常生活では、大体それでことが済みます。それは、目や耳に入ってきた物理的な刺激をボトムアップで情報処理して認識するルートほかに、最初から頭にあった知識や予測を利用して認識するトップダウンのルートを使うからです。この両方のバランスで、時としてトップダウンの方が強すぎると、物理的な刺激と違うものが見えたり聞こえたりするのです。

次に、2つ目のアクションスリップ、動作のミスです。慣れた動作は、こうしたいと思うだけで自動的に実行されます。例えば、車に乗って出かけようという意図が形成されると、スキーマが活性化し、車のキーを出すとか、免許証をポケットに入れるとか、ドアをあけてシートベルトをするといった、いつもやっている動作が自動的に次々と出てきます。しかし、時として、例えばある2つの似たスキーマがあって、前半は一緒だけど後半は違うとい

う場合に、ふと、いつもやっている動作が出てしまっただけで間違いが起きます。そして、事前に注意を与えても間違えるときには間違えるという特徴を持っています。

次は3つ目の記憶のミス、すなわち、記憶の失敗、失念などです。記憶には「覚

える」、「記憶を保つ」、「思い出す」の3段階のフェーズがあります。もともと記憶していないというものはいいのです。作業のとき思い出せなければ、マニュアルを見たり、人に聞いたりすれば、事故は起こりません。問題は、大事なことをやり忘れるとか、言い忘れるとか、忘れ物みたいなタイプです。

心理学では、最近、展望的記憶についての研究が盛んに行われるようになりました。展望的記憶というのは、未来の行動の予定、つまり行動するタイミングとその行動の内容を記憶した後で、その記憶を一旦意識の外に出す。そして、他のことを行います。次に、適切なタイミングで、その意識の外にあった記憶を呼び出して実行する。これが展望的記憶です。これが忘れ物のメカニズム、ポイントで、自分で思い出さなければいけないのに思い出せずに失敗が起きるのです。

うっかりミスの対策について

次に、3つのタイプの失敗に対する対策をお話しします。まず、ミステイクに対しては、しっかり指差して声に出して確認する指差し呼称が大事です。それから、確認会話、念押しをして、「それはこういうことですよ」と、別の言い方で言い換えることをお勧めしています。お互い、暗黙の了解のもとで会話が行われているのをあえて口に出して言う、実はお互い別のことを思っていたということがあり、そのミスに気がつきます。

次に、動作のミスに対しては、間違っただけで動作をできないよう、フルプルーフ（間違っただけでも事故が起らないようにする安全設計）にしたり、標準化などが有効になります。例えば、慌てて押してしまうようなものには、カバーをつけたりします。それから、指差し呼称をすることで、間違っただけで勝手にいつもの動作をしてしまうことを防ぐこともできます。

次に、記憶エラーに対しては、思い出す手がかり、リマインダーを用意することが有効です。リマインダーには、思い出すタイミングを教えるシグナルと思い出す内容を書いたメッセージの2つの要素があります。例えば、紅茶を入れてお湯を注いだら、キッチンタイマーを2分かけるとか、やるべきことをメモしたものを目につくところに張ったり、チェックリストを活用したりします。他には、語呂合わせも結構役に立ちます。

(次ページにつづく)



ヒューマンエラーについて

人間が馬1頭程度のエネルギーをコントロールしていた時代は、人のちょっとしたミスがそんなに大きな結果を招かなかったのですが、現代は、自動車、新幹線、飛行機など、人間には出せないような強い力と速度、それからボタン1つ押しただけでプロセスがどんどん先へ進んでしまう自動化、こういったものを手に入れたために、小さなうっかりミスが、機械やコンピューターによって増幅されて、大きな痛ましい結果を生むということが起きる時代です。

そこで、大きな事故を何とか防ごうということで、ヒューマンエラーという概念が生まれました。システムと人間という考え方の中で、人間工学とか安全工学の世界で生まれてきた概念がヒューマンエラーであって、ただのうっかりミスとか失敗とは違うことに留意してください。ヒューマンエラーというのは、要するに、ヒューマン・マシン・システムの中で発生する人間の失敗で、対策はシステム全体で考えましょうというのが基本的な発想です。

ところが、ヒューマンエラーに対して古い見方をする人は、一部の頼りにならない腐ったリングが事故を起こすのだ。システムはしっかりと設計されてできていて、システムの動きを悪くするのが人間の不安定要素なのだということで、これを「腐ったリング理論」と呼びます。腐ったリングをシステムから取り除くことによってシステムの安全が確保されるという考え方ですが、リングが腐りやすい条件をほったらかしにしておいて、腐ったリングを取り除いていっても、結局ほかのリングが腐ってしまうだけなのです。1つのエラーには背景にたくさんの要因があって、そのエラーのリスクを高めるような要因を1つずつつぶしていかなければ安全は図れないということです。

鉄道にしても飛行機にしても原子力発電にしても、リスクをゼロにするには、運転をやめてしまうしかないわけですが、リスクをゼロにすることができない中で、何とか事故が起きないように現

場の皆さんは頑張っているわけですが、リスクが猛獣だとすると、この檻がどこか錆びていないか、穴があいていないか、日々見回って、弱そうなところは事前に修繕していく、そして鍵を管理して、開けっ放しにならないようルールを決めて、みんなで守っていく、これが安全マネジメントの基本的な考え方です。そして、どこに弱いところがあるのかということが一番よくわかるのは、現場の第一線で働いている人たちです。ヒヤッとしたとかハッとしたりとか、あそこが危ない、このやり方で大丈夫かなといったことをきちんと報告してもらい、それがどの程度のリスクなのかをきちんと評価して、優先順位を決めて対策を打っていくことが安全マネジメントの基本的な考え方です。

ヒューマンエラーの新しい見方では、ヒューマンエラーは失敗の原因ではなく、むしろヒューマンエラーは深いところにある問題の産物であって、問題の兆候であるというふう捉えましょう、と考えます。ヒューマンエラーの発生は、人間が不注意だったのではなくて、道具や設備や機械、作業手順、連絡方法、作業環境、組織文化など、さまざまな要因が関わっていると認識すべきです。ヒューマンエラーは事故調査の結論ではなくて調査の出発点とすべきであるということ、これが新しいヒューマンエラーの見方で、これに従って、対策や安全マネジメントが行われ、より安全な公共輸送機関として、その事業が展開できると思っています。



古関 隆章 (こせき たかふみ) さん

東京大学大学院工学系研究科准教授。1963年生まれ。東京大学大学院工学系研究科電気工学専攻博士課程修了、リニア誘導モータに関する研究で博士(工学)取得。工学部助手、講師を経て、1996年より東京大学大学院工学系研究科助教授、現在に至る。現在、軌道系公共交通への電気工学および制御工学の研究および、人間に学ぶ運動制御の研究に従事。(財)運輸政策研究機構「鉄道利用者等の理解促進による安全性向上に関する調査検討会」座長、国土交通省超電導磁気浮上式鉄道実用技術評価委員会委員、国土交通省交通政策審議会鉄道部会委員などを務める。

鉄道の安全利用促進による事故防止

～ 公共交通のプレーヤとしての旅客と市民の行動の重要性 ～

安全・安定輸送に対する事業者の取り組みについて

我々は、鉄道は安全という前提で毎日使っていますが、一番最初にイギリスで鉄道ができた日というのは、イギリスで最初の鉄道人身事故の日であり、奇しくも、日本で最初に鉄道が通ったときも、やはり最初の事故の日になったというぐらい、鉄道はそもそも危ないものなのです。したがって、その後の鉄道技術は、保安設備の強化の歴史であり、まずは、人間がミスをして機械が守ってくれるというものをつくり上げていこうというのが、少なくとも過去百数十年間の鉄道の歴史であったと言ってよいと思います。

鉄道に関わってけがをする方が年間400人前後、亡くなってし

まう方が年間300人ぐらいとなっています。ただし、この300人というのは、鉄道の仕事に就いている人、あるいは、踏切で亡くなった方が主となっています。鉄道事故件数は、長期的には減ってきていたのが、最近ではちょっと横ばいになっています。

事故の原因を見ると、踏切障害事故が約4割で、鉄道人身障害事故が5割です。いわゆる電気だとか機械の技術でできるということはもうかなりやり尽くしていますが、ヒューマンエラーとか、利用者も含めた人間の問題というものが結構残っています。それから、踏切は、まさに鉄道の中と外との接触点であり、ここに手を突っ込まない限りは、さらに事故を減らすことはできないと思われます。(次ページにつづく)

次に、輸送障害の原因を見てみますと、①部内要因（鉄道係員の取扱い誤り、車両や鉄道施設の故障等によるもの）、②部外要因（自殺や自動車の線路内支障等によるもの）、③災害要因（地震や風水害等によるもの）に分けられ、その割合はほぼ3分の1ずつとなっています。ですから例えば、鉄道事業者が①の部内要因のところだけを、今までより3倍も4倍も投資して減らしていても、お客さんから見たら大していいことにならないということが明らかだと思います。そこで、②の部外要因のところには手を突っ込むことを考えなければだめだということになります。

踏切や駅ホームの問題については、昔からいろんな対策を行っています。転落検知マットや非常停止押しボタン、踏切支障押しボタンなど、いかにお客さん、あるいは沿線の人に知っていただいて、それをどうやって有効に活用してもらうかということと、それからもうひとつは、いたずらをしたら大変だよということをお客さんにもわかってもらうことが、非常に大事なことだと思っています。

踏切の問題については、技術的には、立体交差にすることが本質的な解決法ですがお金が大変かかります。限られたお金の中でどこに重点的に手を入れるかということをお考え、経済的な解を見出すことが大事です。例えば、遮断機がなかったところに遮断機を設置するとか、列車種別や速度に合わせて、踏切の開閉をもっとこまめに制御するための技術開発をするといったことです。

次は、ホームからの転落ですが、何よりも転落させないことを考えることがとても大事です。そこで、ホームドアというのがありますが、これもコストが高く、技術的にも、例えば車両のブレーキの精度をもっと高めないとイケない等、いくつかの問題があり、実はそう簡単に設置できるものではありません。ホームからの転落で何が一番大きなリスクとしてあるかとお考えするとき、もちろん人を落とさないということも大事ですが、お客さん自身で転落しないように自分の身を守るということも大切なことです。

利用者等の理解と協力の必要性について

「メメントモリ (Memento mori)」という言葉があります。これはラテン語で「死を忘れてはならない」「死があることを常に意識しなさい」という意味です。個人的な話で恐縮ですが、私は、かつて脳梗塞を起こしたときに、自分が死ぬということを本当に感じました。リハビリをして、自分の力で歩いたり話したりできる状態に戻ってくるのに、それなりの苦勞がありました。その時、何が一番うれしかったかということ、人の助けがないと通院できなかったのが、自力で公共交通を使って通院できたことです。「ああ、これでようやく社会生活に戻れる」という気持ちになりました。これは、別に障がい者だけの問題ではありません。高齢社会の中で、今元気な我々も、近い将来、自分の身体や判断力が必ず今とは違ったレベルになってしまいます。これら多少のハンディがあっても、きちんと安全に目的地に移動できるということを、システムとしてつくり、そういう環境を乗客も含めて守っていく、これは、とても大事だと私は思います。こうしたことのために、ひとつは、「メメントモリ」、常に死を意識することの中で、安全について真剣に考え、そして、公共の財、公共のインフラとしての鉄道を支えていくことは、鉄道事業者やメーカーだけの責任ではなく、ここに関わっている乗客、沿線住民も考えるべきことと思っています。

「鉄道利用者等の理解促進による安全性向上に関する調査検討会」という

議論の場を2009年に持ち、その成果物として、学校などで広く活用してもらうことも念頭に「鉄道の安全利用に関する手引き」をまとめました。鉄道利用者等というのは具体的には、鉄道利用者、お客さんと周りに住んでいる人を指します。

この手引きの中で、駆け込み乗車に関するアンケートをとり、年齢別に整理したところ、きれいに若年者ほど駆け込み乗車をしたことがある人の割合が高くなっています。これは何を意味しているかと考えると、親が子供を車で送り迎えすることが日常的になり、鉄道をどう使うかという鉄道リテラシー（鉄道に関する知識と利用する能力）が子供に身につけていないということが考えられます。現実には若い人ほど適切ではない行動をとっていて、これを正さない限りは安全になりませんし、その対策のために運賃を値上げしなければならないという好ましからざることになるかもしれません。ですから、親は、自分が鉄道を使わないとしても、子供には、きちんと鉄道の正しい乗り方を教えてやるのが大事なことです。お客様は本当は神様ではありません。旅客も安全な運行のために責任を持つ重要なプレーヤーの1人です。

ルールを守って鉄道を利用しましょう、あるいは、鉄道を邪魔しないようにしましょう、この正しい社会行動をとることは、もはやモラルの問題ではなくて、経済の問題でもあるし、我々自身が社会生活を正しく営めるかどうかという問題であることを、学校の先生や地域の大人が、きちんと若い世代や子どもたちに伝えていかなければならないと思います。

このような精神論のみでなく、今年は「児童を対象とする鉄道利用に係る安全教育の調査検討会」で、教育関係者の方や文部科学省の方にオブザーバーとして入っていただきながら、安全教育用のDVDなどの教材を出しているという具体化の活動も行っています。また、長期的課題として、安全のルール、安全設備、案内図記号などを統一し、国際的な整合性も図っていくことが重要だと思います。さらに、手引きや啓発コンテンツなど、見本になるようなものをつくろうとしていますけど、そういったものをどんどん発展させていくことが大事だと思っています。

有名な「マズローの5段階欲求説」では、まず、人間の一番底に横たわっている欲望として、生きるための欲望、生理的欲求が基盤にあり、その上に自分が安全であるということを確認できる安心の欲求などがあって、さらにその上位には、社会的欲求、自尊の欲求、自己実現の欲求があります。乗客としてあるいは一般



市民として、子供たちに対して正しく鉄道の利用の仕方を教え、公共交通を正しく利用できること、すなわち、安全・安心に対する意識を社会生活の中で育てていくということは、「安全安心の欲求」よりも1つ上の階層にある、人間がより人間らしく生きていくための努力の一環でもあるとも言えましょう。

駅等多くの人が集まる場所では、いつ何時、急に倒れる人に遭遇するかもしれません。そうした緊急時に、だれでも適切な対応がとれ、命を救うことにつながるようとの思いから、AEDや心肺蘇生法の救命処置や駅等での緊急時の対応を気軽に体験していただける「救急フェア」を消防等のご協力をいただきながら、J R西日本との共催により各地で推進しています。

京都駅・三田駅での「救急フェア」



○AED・心肺蘇生法の体験コーナー

消防署の救急隊員や応急手当普及員の資格を持つJ R西日本社員による実技指導のもと、15分程度で体験していただきました。



○非常ボタン体験コーナー

駅ホーム非常ボタンや踏切非常ボタンの模擬装置により操作を体験していただきました。



○消防コーナー

実物の消防車両のほか、子供向けの消防服やミニ消防車の展示等を行い、小さなお子様連れのご家族が楽しめました。

○救急フェアで救命指導した担当者の声

(J R西日本京都電車区運転士・田村彬仁さん)

「目の前でお客様が倒れたのに何をすればいいのかわからない」——このような不安を無くすため、私たち京都電車区では、運転士の有志17名が「応急手当普及員」の資格を取得し、応急手当に関する知識・技能を社員に広める活動を自主的に行っています。

今回、AED操作や心肺蘇生法の指導員として、初めてこのフェアに参加しました。駅前を通りがかった一般市民の方々に、15分ほどのお時間を頂いて体験をしてもらうということから、短時間で大切なことを伝えなければならない難しさがありましたが、私たちはとても良い緊張感を持ちながら、参加者が気軽に体験できるようリラックスした雰囲気づくりを心掛けました。

その結果、ご参加いただいた方々からさまざまな激励のお声を掛けていただき、これからの活動を行っていく上での自信を深めるとともに、今後も社内外問わず積極的に普通救命普及活動を展開し、「応急手当は、かけがえない命を救える可能性を高めること、そして誰もがやること」を伝えていこうと、メンバー一同新たに誓いました。



○ご参加いただいた方からのお声

- ・ 普段経験する事が出来ないことを体験でき、いざというときに大変役立つと思う。
- ・ 制服を着た消防やJ Rの人の指導に親近感を感じた。
- ・ これまで子どもへの一次救命法を学ぶ機会があまりなかったので、とても勉強になった。
- ・ 今回の体験を活かし、今後一人でも多くの方を救助できたらと思う。
- ・ このようなフェアをいろんな所で行ってほしい。何度でも参加したい。
- ・ 多くのJ R社員が資格を持っていて救命指導できることを知り、安心して電車に乗ることができる。
- ・ 緊急時に対応する設備があっても使い方を知らないものも多く、AEDや非常ボタンの使い方を教えてくれる機会が増えることは良いことだと思う。
- ・ 以前にも受講したことはあったが忘れていた部分もあり、思い出すことが出来て良かった。



救急救命のデモンストレーション

○今後の開催予定

日時：平成23年7月2日(土) 10:00～13:30

会場：J R大阪駅 南ゲート広場

(申込み不要、参加無料)

※9月から10月にかけて、天王寺駅、伊丹駅、宝塚駅、尼崎駅、三ノ宮駅でも開催予定

30件の活動、研究に対し、
2,975万円の助成を行っています。

当財団では、大規模な事故、災害が起こった際の備えやその後のケアといった視点から「安全で安心できる社会づくり」に寄与しうる活動や研究に対して助成を行っています。今回は、4月に活動された団体をご紹介します。(順不同)

『第6回 JR 福知山線列車事故 被災者支援イベント フレンズ！川西フェスティバル 2011』の開催

フレンズ！川西フェスティバル実行委員会事務局

平成18年から毎年、JR福知山線列車事故の風化防止とご被害者支援のためのチャリティイベント「フレンズ！川西フェスティバル」を行っています。今年も、4月17日に阪急川西能勢口駅前の広場で、第6回目のフェスティバルが開催されました。

会場では、フリーマーケットやアマチュアバンドによるライブ演奏、地元高校生らによ



ライブ演奏の様子
(写真提供：フレンズ！川西実行委員会)

るダンスパフォーマンスのほか、福知山線列車事故のご被害者を支援するための募金やご被害者の方へ向けたメッセージカードの記入の呼びかけが行われました。今年からの新たな取り組みとしては、福知山線列車事故の発生から現在に至るまでの新聞記事の掲示やフェスティバルの事務局がこれまで行ってきた活動紹介、福知山線列車事故の風化防止や安全意識の向上に向けた活動を行い、当財団の助成先でもある「灯火」の活動を紹介したパネルの展示など、福知山線列車事故を風化させないためのさまざまな取り組みが行われていました。

当日、会場には約1200名の方々が訪れ、出演者たちの熱意あふれる演奏やダンスパフォーマンスを楽しみ、多くの方が福知山線列車事故のご被害者の方々に向けてメッセージカードを記入されていました。イベントのフィナーレでは、フェスティバル実行委員会のメンバーや出演者と会場が一緒になって「翼を下さい」を歌い上げ、会場にいらっしゃる一人ひとりの事故の風化防止に向けた強い思いを感じることができました。

フェスティバルの事務局では、今年の秋頃に消防から講師を招いた講演会を計画されていますので、是非ともご参加いただければと思います。



活動内容のパネル展示



フィナーレの様子

『空色の葉～あなたの道しるべに～』の配布と『メモリアルウォーク 2011』の開催

『空色の会』～JR福知山線事故・負傷者と家族等の会～



メモリアルウォークの様子



命の花の前で

「空色の会」～JR福知山線事故・負傷者と家族等の会～は、公共交通機関の大規模事故の際の被害者支援・援助のあり方の検討や事故の風化防止に向けた活動のほか、安全で安心な公共交通機関の実現を目指して各種活動を行っています。福知山線列車事故から6年目を迎える中、同会では安全への願いを込めた「空色の葉」をJR尼崎駅前等で配布するとともに、4月23日には尼崎市の事故現場近くを歩く『メモリアルウォーク 2011』を行いました。

昨年に引き続き2回目となるメモリアルウォークには、雨天の中、事故当事者の方だけでなく一般参加者も含めた約30名の方々が参加されました。今年は認定NPO法人日本レスキュー協会のメンバーも、東日本大震災の現場で活動した救助犬とセラピー犬とともに参加されました。

参加者の方々はJR塚口駅前の公園を出発し、途中事故現場の献花台やお地藏様に花を手向けられた後に、ダイコンの花で「命」の文字をかたどった畑などに立ち寄り、おのお



事故現場での献花

の事故当時のことや現在の様子などについてお話をされながら、JR尼崎駅前までの約3kmの道のりを1時間半かけて歩かれました。その後は、参加者有志で昼食をとりながらの懇談の場も持たれました。

当日は当財団のスタッフも参加させていただきましたが、改めて安全で安心な公共交通機関の実現に向け、福知山線列車事故の風化防止について考えるきっかけとなりました。

公募助成（活動助成）先における今後の活動予定

現在助成を行っている団体の今後の活動予定をご紹介します。
詳細につきましては、各団体へ直接お問い合わせください。

NPO法人オーシャンゲート ジャパン
(TEL:06-6212-6277)
又は E-mail:oceangate@fancy.ocn.ne.jp
子ども応急手当普及&水面安全サポーター育成

- 日程：平成 23 年 6 月 26 日（日）
7 月 3 日（日）、18 日（祝）、24 日（日）
8 月 7 日（日）、12 日（金）、15 日（月）、
20 日（土）、27 日（土）
9 月 11 日（日）、19 日（祝）、23 日（祝）
※毎月2～3回程度開催中
- 場所：和歌山県 白崎海洋公園
- 内容：いざという時の子どもに対する応急手当と人工呼吸、
温水プールで水面安全管理方法の実施

NPO法人あすかコミュニティ
(TEL:06-6320-5252 《地域防災センター》)

- 『防災アドバイザー講座』（全2回）
●日程：（第1回）平成 23 年 6 月 30 日（木）19 時～21 時
●場所：地域防災センター
- 『災害防災講座』（全4回）
●日程：（第1回）平成 23 年 7 月 28 日（木）19 時～21 時
●場所：地域防災センター
- 東淀川『地域防災フォーラム』
●日程：平成 23 年 7 月 30 日（土）14 時～
●場所：市民活動プラザ大阪東館大ホール
●定員：400 名
- ◎防災に関する相談を受付中（月～金 13-17 時）
◎防災ボランティアを随時募集しています

朗読 ういっしゅ
(TEL:090-5164-1682)

- 朗読劇『さとうきび畑の唄～「命」の大切さをつたえたい～』
●日程：平成 23 年 8 月 7 日（日）11 時～
●場所：クレリ伊丹エクシードホール
●内容：終戦記念にむけて、沖縄戦をテーマにした「さとうきび畑の唄」
の朗読劇をピアノとチェロの生演奏をバックに行います

認定NPO法人日本レスキュー協会
(TEL:072-770-4900)
又は E-mail:info@japan-rescue.com

- ふれあい会
●日程：平成 23 年 7 月 2 日（土）10 時半～12 時
（10 月、12 月にも開催）
※要事前予約（個人可）
- 場所：認定NPO法人日本レスキュー協会
- 内容：事故被害者やご家族、ふれあいに興味のある方とセラピードッグや新しい飼い主を探している犬等とのふれあい。

社団法人高槻市医師会
(TEL:072-661-0123)

- 第5回災害医療救護訓練
●日程：平成 23 年 9 月 10 日（土）
●場所：高槻市立桃園小学校
●内容：大阪市を震源とする震度7
の地震を想定した訓練を医療関係者を中心に実施。
また、AED講習会、トリアージの説明、救急車の見学、
地震体験、炊き出しも行う。

應典院寺町倶楽部

- (TEL:06-6771-7641)
- 『夏のエンディングセミナー 2011
遺族とグリーフワーク～「喪失」の時代をどう生きるか～』（全3回）
●テーマ・場所：「若者発：グリーフコミュニティのすすめ」
平成 23 年 7 月 16 日（土）應典院研修室B
「仏教とスピリチュアルケアをつなぐもの」
平成 23 年 7 月 23 日（土）大蓮寺客殿
「グリーフワークとしての葬送を考える」
平成 23 年 7 月 30 日（土）應典院研修室B
●参加費：一般 1,000 円（應典院寺町倶楽部会員、学生 800 円）
※詳細はホームページ <http://www.outenin.com/> をご覧ください

甲子園口地区まちづくり協議会

- (TEL:0798-66-0036) ※火・木・土 10 時～16 時
- 防災点検隊
●日程：平成 23 年 8 月 21 日（日）、22 日（月）9 時～
●内容：地震・水害で安全なところ、危険なところを歩いて探そう（子どもも参加可能）
マップ作り
●日程：平成 23 年 8 月 27 日（土）10 時～
●内容：防災点検隊が調べた地震・水害で安全なところ、危険なところを地図に落としてみよう
※その他、救急講座や防災講座も行っています

今後の財団主催セミナー

【こころのセミナー】

いのちを考える

～支え助け合う社会をつくる～

- 日程：平成 23 年 7 月 24 日（日）13:30～

- 場所：ホテルグランヴィア大阪

- 内容：◇講演 作家 五木 寛之氏
『いまを生きる』

◇活動報告 社会福祉法人関西いのちの電話

- 定員：500 名（参加無料・申込要）



【五木寛之氏の略歴】

1932 年、福岡県に生まれる。戦後、北朝鮮より引揚げ。早稲田大学文学部ロシア文学科中退。1966 年、『さらばモスクワ愚連隊』で小説現代新人賞、『蒼ざめた馬を見よ』で第 56 回直木賞受賞。『青春の門』で吉川英治文学賞をうける。代表作は『朱鷺の墓』『戒厳令の夜』『風の王国』『蓮如』『大河の一滴』。
ニューヨークで発売された英文版『TARIKI』は、2001 年度「BOOK OF THE YEAR」（スピリチュアル部門銅賞）に選ばれた。また 2002 年度第 50 回菊池寛賞。2010 年、NHK 放送文化賞、第 64 回毎日出版文化賞特別賞。
1981 年より休筆、京都の龍谷大学において仏教史を学ぶが、1985 年より執筆を再開し、現在、泉鏡花文学賞、吉川英治文学賞、その他の選考委員をつとめる。最近作は長編小説『親鸞』。

編集後記

今回で 4 回目の発行となりましたが、いつも各助成先の紹介をする中で活動に対する思いなどをもう少し表現が出来ないかと悩みながら編集しています。より手にされた方が読みやすい内容でお届け出来るように工夫をしていきたいと思っています。今後も主催セミナーや救急フェアを行いますので、是非ともご参加ください。
(編集者：小山)

申込方法：ハガキに「こころのセミナー参加希望」と明記の上、参加される方の氏名（要フリガナ）、住所、電話番号を記載して以下の事務局宛に申してください。

- ※申込締切：7 月 8 日（金）消印有効
- ※ハガキ 1 枚につき 2 名様までの申込みとさせていただきます。
- ※応募が多数の場合は抽選のうえ、7 月 20 日（水）頃にハガキにて抽選結果をお知らせいたします
- 《申込先》〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目 4 番 24 号
J R 西日本財団事務局 「こころのセミナー」係